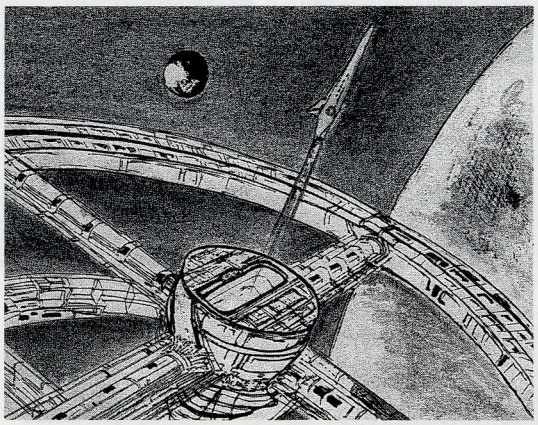
音と文字



難波紘二
（総合科学部）

先日自宅に来た若い人とレーザーディスク版で「二〇〇一年宇宙の旅」という古い映画をみたところ、真空というのがどうも分からないという。聞いてみると高校の物理の時間に教師が真空ポンプのなかに目覚まし時計をいれて、減圧して音が消えたところで、「これが真空だ」と言ったそうである。だから彼は真空とは音のない世界のことだと思っている。

真空にないのは音だけではない、酸素も気圧も熱もない。無の世界である。ところが「無」という世界が分からないという。何にもない世界はイメージできない、という。

無の世界は少なくとも観念の世界にはある。人間が無を想定しえたからゼロが発見されたのは、吉田洋一の名著「零の発見」（岩波新書）を読めばわかる。

真空の恐ろしさを想像できないから、初期の宇宙飛行士が宗教家になった理由が理解できない。重力のない世界、空気のない世界とは、臨死体験の世界であることがわからない。だから宇宙と物質と脳死の問題の間を行きつ戻りつしている立花　隆が理解できない。ましてオウムはぜんぜん理解できない。

真空の恐ろしさがわからないと、真空のなかでなぜ火薬が爆発するのか、ボウマン船長が作業船から母船ディスカヴァリー号に戻るのになぜ火薬を使ったのか、防御ヘルメットなしでどうして生きて母船に戻れたのか、なぜ反乱したコンピュータHAL9000は船長を阻止しようとしなかったのか、なぜ船長の選択が人間的勇気を必要とするもので、緊急脱出用のベイを母船への帰還路として使うという選択の時点で人間はじつはコンピュータとの戦いに勝利していたのだ、ということなどがわからない。

血も凍るというのは、恐怖の比喩としてはありきたりである。真空では血は沸騰する。くだんの教師はなぜビーカーに水を入れて、減圧とともに水が激しく突沸する様をみせてやらなかったのか、と思う。が、答えは分かっている。水を吸わせれば真空ポンプが壊れてしまうのである。壊さないで実験する方法もある。アルコールを使えばよいのである。

物理の教師には化学の知識がない。数学も分からない。哲学はましてわからない。壊れてもよい実験装置を生徒のために使う予算がない。装置を工夫する創意がない。これは何も物理にかぎらない。すべての教科がそうである。そうしてそういう教師を育てているのが大学である。

そう考えていくと、若者の無知を哄うのは天に唾する行為だと気づいた。

やりきれない想いで手に取った雑誌に面白いエッセイがあった。文化人類学の嶋陸奥彦先生（総合科学部）の文章で、中国には「ン」という姓があるという。日本語ではンが来たら、尻とりはお仕舞いである。ンはNgと綴り、黄という漢字を当てるという。嶋先生は、中国文化は文字の世界で、読み方にはいろいろあるといわれる。相手が「コー（黄）」と言ったのに自分は「ゴー（呉）」と聞き違えた。二十四年間も誤解していたと言われる。

文字と音とどちらが先だろう。実は「ン」で始まる人名は他の地域にもある。それは西アフリカだ。私はあそこで、そんな人にたくさんあった。例えばNguesanがそうだ。これはンゲサンと発音する。フランス人が発音通りに表記したものである。

CやKが濁音に変化するのもそれほど珍しい現象ではない。例えばシーザーの姓はガイウスとされているが、ラテン語の綴りはCaiusでもGaiusでもよい。つまりCの音とGの音が曖昧な世界があるのではないか。もともと曖昧だからCの後にGが来たのではないか。

そう考えると、Iの後にJが来て、Mの後にNが来て、Uの後にVが来て、その後にWが来るというアルファベットの成り立ちがうまく説明できるような気がする。

そうすると、音と文字の世界というのは単純なものではなく、初めに音があり、文字に転写され、ついで文字が音に発音され…という無限の相互作用を繰り返して、我々の意識の表象としての世界が形づくられてきたように思われる。

「初めに言葉ありき」というのは、実は音ではなかろうか。

（なんば・こうじ）